

会長の任期を終えて

横山利彦（分子科学研究所）

朝倉清高（北大）前会長を引き継いで、2021年10月より2年間の任期で第21代放射光学会長を拝命しました。2年間何とか大きなトラブルなく無事に務めることができたと思っております。まずは、会員の皆様のご理解・ご支援に感謝申し上げます。また、2年間なんとか務められたのは、いうまでもなく、執行部の皆さん〔庶務幹事・松井文彦さん（分子研）、行事幹事・阿部仁さん（KEK）、編集幹事・若林裕助さん（東北大）、渉外幹事・熊坂崇さん（JASRI）、会計幹事・岡島敏浩さん（あいちSR）、広報幹事・和達大樹さん（兵庫県大）、学会賞幹事・木下豊彦さん（JASRI）、評議員会議長・木村真一さん（阪大）、学会事務局・佐藤亜己奈さん〕のおかげです。さらには評議員の皆様からの真摯なご助言・ご議論に大変お世話になりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

会長任期を終えての挨拶ということで、まずは朝倉前会長からの引継ぎ事項とその現状経過を報告させていただきます。一番目の案件は、データ構造化に関する学会としての見解を可能な限り具体的にまとめることでした。ここでは、データ構造化諮問委員会を設置し、朝倉前会長には委員長を務めていただき、多くの各分野の専門の方々に委員をお願いしました。委員の皆様のご尽力に感謝申し上げます。データ構造化に関する全体的な考え方と各計測手法毎のメタデータ等のあり方などを答申としていただき、少し遅れてしまいましたが、新執行部・新評議員会での審議をお願いしたところです。データ構造化のゴールはまだまだ先が長いですが、将来的には、放射光計測データが利用者の研究に役立つよう公開され、データ提供すること自体が研究者の業績として広く認知されるようになることを期待しています。次に、2019年にご逝去された初代会長・高良和武先生、2代会長・佐々木泰三先生の偉業に敬意を表しお名前を冠した学会賞の新設を実行しました。評議員会では大変しっかりした議論をいただき、結論として、単一の賞として高良・佐々木賞を設けることとなり、2023年度には最初の受賞者2名が決まるまでに至りました。続いて、放射光60周年記念（我が国においてはじめて放射光が1963年にINS-SORで利用されてから60年の意味）事業を行うこととなりました。本稿執筆時の今はまだこの準備に追われている状況ですが、海外からの招待講演者7名を含むシンポジウムを2023年10月24～25日に岡崎市の岡崎コンファレンスセンターで開催予定です。開催が次期会長・足立伸一さん（KEK）の任期期間に入ってしまう

次期会長・執行部の皆様には恐縮しておりますが、盛会を祈念しています。また、これら3つの引継事項以外の運用も、基本的には代々の学会執行部の方針を継続した運用を行ってこれたと思っております。

学会賞の授賞に関しては、2023年度には高良・佐々木賞を加えて、2年間にわたって無事行えました。会長を引き継いですぐの2022年度は、放射光科学賞に野村昌治さん（KEK）、奨励賞に河口彰吾さん（JASRI）・鈴木博人さん（東北大）、功労報賞に山本安一さん（立命大）が受賞されました。2023年度は、放射光科学賞に谷口雅樹さん（広島大）、高良・佐々木賞に原田慈久さん（東大）・三村秀和さん（東大）、奨励賞に石井祐太さん（東北大）・久保田雄也さん（理研）、原野貴幸さん（日本製鉄）、功労報賞に中村永研さん（分子研）が受賞されました。改めておめでとうございます。選考委員の先生方には、大変困難な選考をしていただきご尽力・ご英断に感謝申し上げます。候補者の方々は皆さん大変優れた業績を挙げておられ、その中から多くの落選者が出てしまうことは本当に忍びなかったのですが、これも放射光科学の重厚で秀逸な額多くの成果の証でもあり、今後とも一層優れた研究がたくさん成就することを祈念いたします。

2022年11月には、東北大で Asia Oceania International Conference on Synchrotron Radiation Instruments (AO-SRI) 2022が開催され、学会としても協力しました。シンクロトロン放射光研究に関するアジア・オセアニア・フォーラム AOFSSR（の評議員を務める機関）が主催し、今後も3年に一度の間隔で開催される国際会議の記念すべき第1回会合でした。我が国は放射光施設が数多いため、学会長が代表してAOFSSR評議員を務めることとなっています。あまりお役に立てたとは言えないと思いますが、学会としてAOFSSRの発展に資する支えとして少しの協力はできたと思っております。また、AOFSSRに関しては、2023年6月に、3年間にわたってコロナ禍のため開催されなかったAOF Synchrotron Radiation Schoolがタイのシンクロトロン光研究所で開催され、前例に従って学生会員4名の渡航費援助を行いました。これについてもたくさんの参加希望をいただいて選考に苦慮しましたが、参加学生の皆さんから大変有意義な会であったとの報告をいただき喜んでおります。また、2022年12月に、日本学術会議から公募のあった未来の学術振興構想に学会として応募しました。施設代表者・評議員を中心とした皆様

のオールジャパンの放射光科学新展開を軸とした構想を提出させていただきました。

2022, 2023年度の日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウムは2回ともコロナ禍での開催となってしまいました。2022年度はほぼ完全にオンライン開催（学会賞受賞式・受賞講演のみ東大本郷キャンパスでオンサイト・オンライン配信）でしたが、組織委員長・小飼真人さん（東京理大）、実行委員長・松田巖さん（東大）らのご尽力で、オンラインながら大変盛会であったと感じました。2023年度は、立命館大びわこ・くさつキャンパスで開催され、実行委員長・小島一男さん（立命大）等のもと、感

染対策を十分に施したオンサイト開催（口頭講演はオンライン配信，懇親会は無し）を盛会に行うことができました。関係者の皆様に改めて深く感謝の意を表したく思います。

2年間大変お世話になりました。至らぬことばかりで大変恐縮で申し訳ありませんでしたが、皆様のご助言・ご支援に感謝申し上げます。今後は、足立新会長のもと、ますます学会として大きく発展し、放射光科学研究がますます成就していくことと思います。2年間ありがとうございました。

庶務幹事の二年間

松井文彦（分子科学研究所）

会長の横山先生に声をかけていただき、2021年10月より庶務幹事を二年間務めさせていただきました。評議員会の参加さえも初心者マークをつけての運転でのスタートでした。前任の田先生から「総会を乗り切れば楽になる」とアドバイスをいただきましたが、議事資料は半ばテンプレート化されており、頼れる六法全書のようなポラリス佐藤さんと卒なく議事をさばっていただいた木村真一先生のおかげで、あがり症の私でもなんとかこなせた、というのが実際のところでした。早速の合同シンポジウムでは立命でお世話になった山本安一さんが功労報賞を受賞され、二年目の合同シンポジウム（立命館大）では分子研 UVSOR の中村永研さんが同賞を受賞されました。また高良・佐々木賞が無事新設されました。久々の対面形式の合同シンポジウムで庶務幹事の特権で原田慈久さん、三村秀和さんの第一回高良・佐々木賞受賞記念講演の司会を務めさせていただいたこともうれしい思い出となりました。科学技術の最先端を切り開く研究者の顕彰とともに、放射光施設を支える方々の功績にスポットライトを当て、コミュニティの財産としていくのはまさに学会の重要な役割ですね。

放射光の黎明期から半世紀がたち、放射光施設が科学技術基盤として非専門家のユーザーにも広く開かれる時代になりました。技術伝承・人材育成もさることながら、放射光利用の垣根を下げることも大きな課題です。リモート実験等諮問委員会に引き続き、データ構造化諮問委員会（委員長：北大朝倉先生）が新設され、施設を横断した場での議論に参加しました。多次元化・大規模化する測定データを迅速・安全な保管、関連する全環境パラメータの記録と合わせて利活用するインフラ整備、社会の共有財産として公開データベースの構築などにおいて諸課題が顕在化されました。これらの解決に学会の叡智が期待されています。今後、次期会長ののもとで常設委員会として発展させていくことになっています。

さて初心者マークが外れての二年目は打って変わって学会の存在意義について考える一年となりました。これまで学術会議会員の改選に合わせ3年ごとにマスタープラン

の公募があり、通常でしたら2022年が新規募集の年でした。庶務幹事をお引き受けする1年前に学術会議会員の任命問題（2020年9月）が起りましたが、その結果としてマスタープランの募集がなくなり、「未来の学術振興構想」という形に衣替えしました。庶務幹事としてその応募作業に携わり、マスタープラン2020を継承し会員の皆さんからのコメントを取り入れた提案書「新学術分野の創成と社会課題の解決を実現する先端放射光科学」を取りまとめました。その後、文科省が学術会議とは別個にロードマップの募集を行い、放射光コミュニティからはマスタープラン2020の具現化として進めてきた連携を基盤に3施設（PF/UVSOR/HiSOR）がそれぞれ応募を行いました。これらの取り組みを通じて、国内の放射光施設のネットワークが国内にとどまらない科学技術の重要なインフラであることを再確認しました。一方で、その維持・発展の実現のために従来学会が発揮してきたイニシアティブが取りづらくなっている状況に近年陥っていることを痛感しました。ここで評論家ぶるつもりはありませんが、「コロナ禍」という言葉で曖昧にされ見えなくなっている構造的な問題に向き合わなければならない気がしています。この問題への取り組みを含め、二年間の庶務幹事としての仕事を自己採点すると、果たして合格点に達したかどうか…。

2023年10月に放射光60周年記念シンポジウムを開催します。任期が終わり、ヒラの会員に戻るはずでしたが、もうしばらく延長戦。前会長・庶務幹事の所属の分子研で皆様をお迎えする準備を前幹事・アドバイザーの先生からなる実行委員会で行っています。日本は多数の放射光施設を建設・運用し、ドイツや米国と並ぶ厚い層の研究コミュニティを構築してきました。2023年末にはいよいよ世界で一番新しいリング NanoTerasu から光が出始めます。これからの60年の夢をどう描き、どう実現していくか皆さんと語り合える場となれば、と楽しみにしています。

これまでご支援・ご協力いただいた皆様、ありがとうございました。引き続き放射光業界を盛り上げていけたら、と思います。どうぞよろしくお願い致します。

行事幹事を終えて

阿部 仁 (KEK 物質構造科学研究所/茨城大学)

2021年10月から行事幹事となり、あっという間に二年が経ちました。個人的な話になりますが、横山会長は私が学部生の時に講義を受け「この先生が所属している研究室に行きたい」と思い、その後の私の進路に大きな影響を下された先生のお一人です。そんな横山会長から「行事幹事に」というお話を頂いたので、引き受ける以外の選択肢はありませんでした。その時は“行事”とつくのでイベント関連を担当するのだろうくらいに思っていて、年会・放射光科学合同シンポジウムの組織委員長になるという重大さを後から認識し、これは大変なことになったと思いました。年会・放射光科学合同シンポジウムは、その成り立ちから、実行委員会、組織委員会、プログラム委員会、また各共催団体との関係、などがやや入り組んでいるように感じられ、整理して理解する必要がある、良い勉強になりました。

2021年はまだコロナ禍の終わりが見えない時期でしたので、JSR2022は授賞式及び受賞講演のみ東京大学小柴ホールより中継されましたが、これ以外のセッションはオンラインで開催されました。私は行事幹事ではありましたが、組織委員長は前行事幹事の小嗣先生（東京理科大）が務められていました。イレギュラーな開催形式でしたが、実行委員会の先生方と連携され、非常に滑らかに運営されていたのが印象的でした。と同時に、JSR2023組織委員長となることに身の引き締まる思いがしたことを覚えています。

JSR2023は小島先生（立命館大）を実行委員長として立命館大学で開催されました。コロナ禍以降初めて現地開催となったことで、難しい決断・判断が迫られる場面が数多くありました。久しぶりの現地開催が大成功に終わったことは、何より実行委員会の先生方のお陰と感謝致します。

また、私事ですが、次女の出産予定日と非常に近い開催日だったため、現地には行かないことをお許し頂いた会長、実行委員長をはじめとする関係者の皆様には感謝してもきれません。行事委員の丹羽先生（KEK 物構研）には副組織委員長になって頂いたことを感謝すると共に、当日の重責を押し付ける形になってしまったことを申し訳なく思います。

JSR2024は坂田先生（JASRI）を実行委員長としてアクリエひめじで開催されます。大きな変更点としては、学生賞の審査対象を口頭発表のみとしたことが挙げられます。この変更に伴うプログラム編成上の心配もありますが、プログラム委員長の玉作先生（理研）を中心に、魅力的なプログラムが組まれているものと思います。ぜひ、JSR2024を楽しんで頂きたいと思います。

行事幹事は行事委員会を組織し、基礎講習会と若手研究会の開催も行なっています。詳細をここに書くには字数が足りませんが、ご担当頂いた行事委員の先生方、ご講演頂いた先生方に感謝致します。

以上が例年の行事幹事が関わる主な行事なのですが、今年は「60 years of Synchrotron Radiation in Japan (JPSR60)」(放射光60周年記念シンポジウム)が岡崎コンファレンスセンターで開催されました。コロナ禍など様々な巡り合わせで私の任期中に企画することになったものですが、国内外から豪華な招待講演者をお招きし、日本の放射光の歴史を振り返りながら将来を展望する、“次”の感じられるシンポジウムになっていれば幸いです。

最後になりますが、私が行事幹事を大過なく終えることができるのも、事務局の佐藤さん、中村さんに数え切れないほど助けて頂いたお陰です。ありがとうございました。

編集幹事を終えて

若林裕助（東北大学大学院理学研究科）

2年間の編集幹事の任期を大きな問題なく終えることができて、まずは非常に安心してしています。関係する28名の編集委員の先生方、そして何より事務局の佐藤さんに非常に助けられました。ありがとうございました。会誌で同じような分野の記事が続くのは好ましく無いのですが、記事提案をする編集委員の専門性から大きく外れた記事は誰も考えつきません。会誌を使って編集委員の研究の宣伝するのは筋が違いますので、いくらよくわかっていても自分たちの研究は記事には通常、できません。コロナ禍で多くの学会・国際会議がなくなったりオンラインになったため、編集委員の先生方の情報収集も困難があったと思われます。そんな中で会誌が発行できるだけの記事を提案してくれた委員の先生方に大きな敬意を示したいと思います。

編集幹事になる際は、こんな事をしてみたい、という考えもあったのですが、実際やってみるとほとんど実現できなかった気がします。縁あって（多少）情報科学を用いた解析法の開発を数年前に行いました。その時の経験から、

自分で手を動かさないと、やはり自分の研究に情報科学を活用する事はできないと実感しました。一方、多くの人たちは「自分でない誰かが、自分のデータから計算機で正しい情報を出してくれる」事をなんとなく期待しているように感じています（これは先日のSPRING-8シンポジウムでも話題になりました）。この部分の導入を助けたい、と思ってかなり色々編集委員会で議論してできたのが、36巻5号の特集でした。もう少しカバーする分野を広げ、連載企画にしたかったのですが、力及ばず任期切れに間に合うようにまとめることになりました。

将来に向けて。ナノテラスがそろそろ動き始めます。それに合わせて、関係の先生方は非常にお忙しい所ですが、ナノテラス特集を出せそうです。他学会の会誌との合同企画も議論が始まりました。これらは次の池本編集幹事にまとめていただく事になりました。池本先生、よろしくお願いいたします。

渉外幹事を終えて

熊坂 崇（高輝度光科学研究センター）

2021年10月からの任期を終え、高エネルギー加速器研究機構の佐藤友子先生に引き継ぎを致しました。この2年間で350件程度の各種案内について情報発信を行いました。この数字を分析してみると、コロナ禍中の引き継ぎ後1年を経て対面での会合が徐々に再開されていくなか、最初の1年間のほうがむしろ処理件数は3割ほど多かったことから、コロナ禍中の不自由の中、みなさんがオンライン会議などを駆使して活動を維持されたことがわかります。この情報発信以外の用務として、学会の所持する文書などのデジタルデータの管理について幹部で利用できるクラウドストレージの運用を開始し、情報管理の基盤整備を行いました。また、DX化の進展の中、測定試料の輸送に

ついて課題となっていた低温輸送容器ドライシッパーの荷扱いは、一部業者にて正式な受け付けが始まりました。その調整にご尽力いただいた関係者の皆様に感謝いたします。なお、男女共同参画については、その学協会連絡会における当学会の資格が今秋よりオブザーバー会員から正式会員へ移行します。その活動あり方について複数のご意見をいただきましたが、新執行部で再検討していくことになりました。

末筆ではございますが、任期中に頂いた幹事会および評議員会の先生方、事務局の皆様からの御指導ならびに本学会の会員皆様のご協力に厚く感謝申し上げます。

会計幹事を終えて

岡島敏浩（あいちシンクロトロン光センター）

横山前会長から仰せつかり、2021年10月から2年間会計幹事を務めさせていただきました。私としてはほっとしたいところですが、前幹事は10月に開かれる放射光60周年（JPSR60）の実行委員としての役目が残っており、それが終わるまではまだ息が抜けません。前任の高橋嘉夫先生（東京大学）から会計幹事を引き継いだのは、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）による影響の真った中のことでした。世の中の自粛ムードの中、引継後初めての年会はオンライン開催になりました。幹事会・評議員会、若手研究会、等々、学会の多くの行事がオンライン開催や場合によっては延期になるなど、それまでの予算・決算とは違った手続きを行うことを余儀なくされました。一方、幹事2年目にはCOVID-19の影響が残る中、現地実行委員の方々の努力により現地（立命館大学）で年会を行うことができ、久しぶりに会う仲間たちとの会話が、今後の研究の活力に繋がったことは言うまでもありません。今後、オンライン、オンサイト両面のメリットを生かした形で学会の活動が進んでいくものと思います。学会の予算を立てるにあたって気になったことが一つあります。それは、単調に会員数が減少していることです。これまで学会を支えてくださっていたシニアの方々が職場の定年を迎え、学会を退会されたり、もしくはシニア会員として登録をされたり

しますが、その減った分を穴埋めするだけの若手会員が増えていません。会員の減少は会費の減収に直接繋がり、学会の様々な活動にも影響を与えてきます。学会の財政は、これまでの学会執行部の先生方のご努力や会員の皆様のご協力によって、繰越金が毎年増加する傾向にあります。この間に将来への投資として、この繰越金の一部を使わせていただき、若手会員、特に学生会員の獲得や活動を援助する取り組みを行いました。一つは、COVID-19の影響下であった2021年度に実施した学生会員の会費無料化を2022、2023年度も継続し、今後も継続して行うこととしました。もう一つは、学生会員等が AOF への参加のための補助額を増やすこととしました。なお、学生会員の会費無料化については、学会の財政状況を踏まえ、適切な時期に見直しが行われます。私が所属するあいち SR では多くの企業の方が利用に來られますが、シンクロトロン光の利用するにあたって、若手の人材が足りない、と言うことをよく耳にします。企業への橋渡しとして学会が貢献することができれば、企業に所属する若手会員の増加につながるのではないかと考えます。最後になりますが、2年間の任期中におきまして幹事会および評議員会の先生方からいただいたご指導、並びに、学会員の皆様のご協力に深く感謝いたします。

広報幹事を終えて

和達大樹（兵庫県立大学）

2020年4月1日から広報幹事に就任いたしまして2期務め、3年半経ちました。新設された役職ということで、放射光学会の活動を会員のみでなく世間に分かりやすく伝えるため、新しく何ができるかを考えながらの活動となりました。

まずは、「新型コロナウイルス対策に関する取り組み」のホームページを作成し、各放射光施設のコロナ対応情報と課題申請等の取り組みをまとめてお伝えすることを目指しました。そして、ますます重要性を増しているリモート実験のために「リモート測定に向けた試料準備」のホームページ作成も行いました。スライドを出してくださった各

放射光施設の皆様には大変感謝しております。

また、会員の皆様の利便性を高め、円滑な学会運営のため、会員マイページシステム「SMOOSY」を導入しました。請求書や領収書のペーパレス化などの、導入による多くのメリットをすでに感じていただいているのではと思っています。

学会ホームページについても全面的な改訂を行い、今後の最近の放射光科学の動静を発信すること、周辺研究分野との垣根を除くこと、会員間の交流（特に賛助会員と学会員の交流）を促進すること、などに貢献できたかと思います。

そしてさらに大事なこととして、若手部会の活性化も目指しました。若手有志研究会を二回開催することができたので、今後これを定期的に開催できればと思いますし、さらに若手同士の交流を図る新しいイベントにつながることを期待しています。

.....

以上のように、会員の皆様のご協力により、2期にわたる広報活動を行うことができました。ありがとうございます。私自身は今後も、わかりやすい広報活動や若手の活動の活性化に貢献できればと思っています。

学会賞幹事を終えて

木下豊彦（高輝度光科学研究センター）

2年間の幹事の任期が終わろうとしています。「学会賞幹事」は当初想定していた通り、私の一代限りの幹事だったようです。昨年度の記事にも書かせていただきましたが、朝倉前会長執行部からの引継ぎで、高良先生、佐々木先生の名前を冠した賞を新たに設けることがミッションでした。議論が紛糾すれば、賞の公募と審査に2年程度かかる可能性もあるということでしたので、幹事をお引き受けいたしました。その後の幹事会、評議員会での議論が思いのほかスムーズにいったため、すでに昨年度から「高良・佐々木賞」が設定され、お二人の先生方の受賞が決まりました。今年も今頃、第2回目の審査が、次期足立新

会長の下で行われているものと承知しております。というわけで、学会賞幹事としての仕事は一年目でほぼ終わったような形でしたが、2年目の任期中には幹事会の中での議論でいろいろな意見を述べさせていただくような立場で参加しておりました。特に10月に開催される「放射光60周年記念シンポジウム」については、意義深いものになるものと期待しております。太田会長の時代の庶務幹事、村上会長の時の会計幹事に引き続いて3回目の幹事でしたが、無事に終えられそうではとしているところです。足立新会長の任期中には評議員としてお世話になります。今後ともよろしくお願いいたします。